

イラクの子どもを救う会

ニュース

発行：イラクの子どもを救う会 発行人：西谷文和
 〒565-0824 吹田市山田西2-19-14
 TEL 06 (4864) 1828 FAX 06 (6875) 8980
 E-mail : nishinishi@r3.dion.ne.jp URL : http://www.nowiraq.com/

No.31

April 2012

極寒のカブール テントの中の悲しみ

今年2月、9度目のアフガン取材を敢行した。首都カブールは20年に1度の大寒波に見舞われていて、気温は何とマイナス20度まで下がり、大雪で空港は閉鎖された。凍える大地に避難民キャンプのテントが並ぶ。あまりの寒さで、子どもがたくさん死んでいた。低体温症と肺炎、そして大やけど。日本からの支援50億ドル（約4000億円）は、避難民キャンプにも病院にも届いていなかった。

カブールから北西へ約7キロ、国道沿いにチャライカンバール避難民キャンプが広がる。泥でできた急ごしらえの家が並び、天井はテントシート。そのシートの上に雪が覆いかぶさっている。昨晩からの大雪で、国道はチェーンを巻いた車で渋滞している。物乞い女性たちが雪の上

裸足にサンダル。氷結した雪の上に座り込みながら、彼女たちは毎日8時間、こうして金を恵んでくれる人待つか？

開発問題が発生。国際社会はイランに対し、原油輸入制限などの経済制裁を行った。経済的に

余裕がなくなったイラン政府にとって、アフガン難民はお荷物になった。そしてイラン政府は、難民たちの永住を認めず、アフガンに追い返すようになった。その時、夫はイランで仕事を見つけていた。アフガンに帰りたくない夫だけイランに残り、行方不明となった。彼女と3人の子どもは、カブールに戻ってきた。家も仕事もない生活が始まった。

に座り込み、渋滞した車に向かって手を差し伸べている。白い雪に青いブルカ、足元を見れば

「もちろん寒いわよ。でも他にどうしろというの？子どもを食ばさせるためには、ここで物乞いするしかないのよ」

「この雪がテントの中に入ってきているの。雪が溶けて家の中はビシヤビシヤ。子どもは風邪をひいているし、せめてパンを確保しないと」。

「とても寒くてつらい。でもここに座るしか方法がないの」。杖を持って座り込んでいる、年配の別の物乞い女性が、ブルカの中で泣き出した。



日米の高校生が描いた絵をカブールの孤児院に届けました

「夫はイランにいるの。私と子どもだけアフガンに戻されたの」

彼女たちは、アフガン戦争が激しくなると、イランに逃げた当初イランはアフガン難民を受け入れていたが、米国とイランの間に濃縮ウラン問題、核兵器



マイナス10℃の気温。雪の中で物乞いする女性

物乞いによる一日の収入は、100アフガニー程度（約200円）。辛うじて一日のパンを確保できていけるギリギリの生活だ。



釜に落ちた子ども。四肢は切断しなければならない

今回の日本からの支援金で、無事毛布やシートを配ることができた。あらためて支援いただいたみなさんに感謝いたします。ただ、全ての避難民、近隣の貧しい人々には、支援物資が行き

届かなかったことと、食料や医薬品などその他の物資援助は無理でした。しかしながら今回の毛布とシートは、確実に何十名、何百名の人々にとっては、まさに緊急の命綱になったと思います。一言で述べると「不十分だが、絶対に必要な支援」でした。次にアフガンを訪れるのは、おそらく今年の秋になると思います。引き続き、ご支援をよろしくお願いたします。

キャンプの次は、カブール市内にあるインディラガンジー子ども病院を訪れた。ここをいつ訪れても驚く事ばかりだ。特に厳冬の季節、「やけど病棟」は、この世の地獄といえる状況だ。重症の赤ちゃんが弱々しく泣いている。生後10ヶ月の女の子。両手両足の指が黒ずんで壊死している。17日前にここへ運び込まれてきた。「この子の両手両



保育器に2人

えている。足は棒の様に細い。昨年の冬は何とか越せたようだ。が、今年はどうか？ このキャンプでは、1月だけで8人の子どもが亡くなっている。2月はずっと死ぬだろう、低体温症と肺炎で。

泥でできた壁、天井にシートを張ってあるだけの「家」でゴルジュマちゃんと再会。もう11歳になって、ちよつと背も伸びたようだ。左手がないことで、いじめられていたが、今は学校に通っている。「ダリ語、算数、理科」、教科では何が好きなの？と尋ねるも、「お金がほしい」。質問の意味を理解しているのかな？

5歳の女の子が震えている。ペラペラの民族衣装一枚に素足にサンダル。寒いなんてものじゃない。このまま雪が続いたら、命がなくなるかどうかの瀬戸際。実は、このドゥーとセは、私に地にテントを建てていて、地主が立ち退きを迫っている。すでにいくつかのテントは撤去され、新たな場所を立て直した。近々に別の場所を探さないと、このキャンプごと壊される可能性があるのだ。アフガン政府は何もしないし、国連も見えて見ぬふり。日本からの援助金50億ドルがあれば、すぐにでも新たな場所に

6歳の男の子が両足に大やけどを負っている。意識を失って、ストーブに倒れ込んだのだ。なぜ意識を？ハビープ医師の説明。「エプリプシー（てんかん発作）だ。この子は3歳の時に、父親の死を見た。カンダハールで米軍の車列が通りかかった時、タリバンが仕掛けた路肩爆弾が爆発。運悪くその付近を通行していた父親が、身体から大量の血を流して亡くなった。父が亡くなる様子をこの子は目撃し、それ以来、精神を病んでしまった。そして時々意識不明になる。それでストーブに...」

も障害を持つのだ。あらためてこの戦争の理不尽さを痛感する。そんなことを取材している間にも新しい患者が運び込まれてくる。ワリーグちゃん、生後11ヶ月の女の子。重篤な肺炎患者で、大やけどを負っている。「釜に落ちた。昨夜だ」。医師はワリーグちゃんの着衣をめぐり上げる。彼女の小さな胸とお腹が、呼吸の度にペコッ、ペコッと音を立ててへこむ。右目はやけどでつぶれている。呼吸困



配給の毛布を求めてやって来た近隣の女性たち

物乞い女性たちと分かれて、チャライカンバーレ避難民キャンプに入る。キャンプ入り口で、ワキールと再会。米軍の空爆で左手を方から失ったゴルジュマちゃんの父親で、このキャンプのリーダーの1人。ワキールの案内で、キャンプの中を見て回る。「2年前に、お前たちからも

らったテントシートだ。でもこの大雪で、シートが濡れて雨漏りがする。穴もあいているし、新しく丈夫なテントシートが必要なんだ。ワキールは、日本からの援助に感謝しながらも、「昨年、どうしてテントシートを援助してくれなかったんだ」と責めてくる。

子どもを撮影して気がつくのは、男の子は辛うじて靴を履いているが、女の子は素足にサンダルが多いということ。男尊女卑の傾向が強いアフガンでは、どうしても「男の子優先」になる。もちろんその男の子も震えているのだが。

配布開始。その姿を見ていた近所の女性たちがやってくる。ブルカの奥から「毛布、毛布」と訴える。テント生活こそしていないものの、近隣に住む貧しい彼女たちも、子どもを守るために必死なのだ。ブルカ女性たちと避難民たちが言い争っている。気の毒だが、避難民を優先させる。

昨年取材したシュマーグル君に再会。やはり下半身裸で、震



避難民に並んでもらって毛布配給開始



20km圏内を案内してくれた横川さんご夫妻

「最初にこの検問所を通過する時は緊張したけどね、今は慣れちゃった(笑)」。本日、私を案内してくるののは、南相馬市原町区で馬市原町区で和洋菓子店「松月堂」を営む横川徳明さん、千代さんご夫妻。南相馬市役所から横川さんの車で国道6号線を南下すること10数分、前方に機動隊が検問所を作っている。「これより原発

20キロ圏内。立ち入り許可証が必要」との看板と三重県警の警官が数人。全国から応援に入っている警官たちも被曝するので、ローテーションで検問に当たっている。昨年11月は、ここで大阪府警の若手警官にチェックを受けた。左手のコンビニ駐車場では、車を止めて放射線防護服に着替えている人がチラホラ。許可証を見せて、圏内に入る。6号線を南下、人もすれ違う車もない、不気味な静寂が続く。国道左手の海側は、津波で流され何もなくなってしまう平原。その向こうに波しぶき。「ここから海が見えるなんてねえ。風景がすっかり変わっちゃったね」ハンドルを握る横川さんがつぶやく。かつての田んぼ、家屋だった



検問所にて この日は三重県警が任務に当たっていた

17マイクローシールドで推移している。「この地域より福島市、郡山市の方が高いよ。政府は距離だけで立ち入り禁止にしているからね」とはご主人。倉庫から、「見えるようになった」数キロ先の海岸へ。海への道は311の時点のまま。あちこちに地割れ、そして津波で流された自動車や自動販売機がかつての田んぼに転がっている。海岸沿いにガレキの山。自衛隊と警察がガレキを一方所に集め、積み上げた。ガレキの上に線量計を置く。数値はじわじわと上昇し、0.8マイクログラム。申し訳ないが、このガレキは全国に拡散せず、「低レベル放射性廃棄物」として安全に県内で処理するしかないだろう。常磐線の小高駅へ。土盛りの上の線路が防波堤の役割をして

ピーピーピッピー。線量計からアラーム音が鳴り響く。「8マイクログラム。8.4、8.56...。あー9マイクログラム越えちゃった」。ここは福島県南相馬市と浪江町の境界、Y牧場のゲート前。餓死した牛の頭蓋骨が並び、「東電、国は大損害を償え」「殺処分反対」など、ペンキで書かれた怒りの看板。3月13日、福島第1原発20キロ圏内の立ち入り禁止区域に入った。ゴーストタウンと化した、半永久的に住めなくなった故郷。原発から「風下の町」をレポートする。

原発20km圏内に入る 「風下の町」からのレポート

とろろ津波で流された車や自動販売機。一年前、3・11のいま、時が止まっている。検問ラインから10分も走ると、松月堂の倉庫。横川さん夫妻が、海が見える国道脇に花を手向ける。「この辺りは津波で亡くなった人が多くてね。月に一回は圏内に入るから、こうして花を供えるの」と奥さん。花のそばに小さなお坊さんの人形を置く。「この人形、お経をあげての。お坊さんが来れないからね」。



供養の花とお坊さんの人形



病棟の外壁だけが塗り替えられていく

難で泣くこともできず、開いている左目で、ただじっと私のカメラを見つめている。4日後この病室を再度訪れた。あの赤ちゃんの手足は切断されずにすんだ。2人とも亡くなつて、ベッドにはいなかった。がん病棟には、劣化ウラン弾の影響と思われる子どもたちがたくさん入院していた。白血病の子どもたちが横たわっている。その中に13歳の少女。スカーフを取ると、異常に膨れ上がった首筋。甲状腺がんである。激戦地のガズニ出身。半月前、高熱が出て、朝目覚めたら、首が腫れ上がっていた。ガズニからここまで近所の人々にお金を借りてやってきた。チェルノブイリでもそうだったが、この年頃の少女に甲状腺がんが多発し、甲状腺を取り除く手術跡が首に残ったので、「チェルノブイリネックレス」と言われた。あらためて福島の子どもが心配になる。新生児室へ。やはり先天性奇形の子どもが保育器の中で眠っている。背中に頭ほどの大きな腫瘍。この症状もイラク、アフガンに共通している。「もしかすると劣化ウラン弾の影響?」とハビブ医師に尋ねると、「もしかして ではない。確実

にそうだ」との返答。しかしこの国では、この事実を医師がおおっぴらに表明することはできない。「高度に政治的な問題」なので、タブーになっている。病院の外へ出る。病院の外壁が、ピンクに塗り替えられている。「必要ない工事はかりしてやるよ」医師がつぶやく。やけどの治療薬も、抗がん剤も、未熟児のための保育器も、全然足りないのに、なぜ外壁塗り替え工事だけ? ワイロ政治だ。日本などから支援金が入る、カルザイ政権は、建設会社に工事を発注し、不必要な工事を繰り返すことで建設会社が潤う。そしてその工事費の一部が政治家や官僚にキックバックされ、ワイロに化ける。カブールのあちこちで道路工事やニュータウンの建設工事が進行中だ。米軍からアフガン軍へ治安権限が委譲されるため、日本から多額の支援金が、軍や警察の給与になる。しかし避難民キャンプや、物乞い女性たち、

病院には回って来ない。「アフガンの治安が悪いので、JICAも大使館も、カブールにいながら、現地事務所にもついで、満足に現場を見ることなく、ただ粛々と援助予算をカルザイに与え続けている。現場を見ずに、指導もせずに、金だけが動いているのだ。今年7月、東京で「アフガン復興会議」が開催される。私は先月3月29日に国会へ行った。民主党、社民党の「テロ対策特別委員会」委員のみなさんに、アフガンの映像を見ていただき、日本の支援金が困っている人々に届いていない現状をお伝えした。7月の復興会議までに、あまり時間はないのだが「せっかくなの人道支援金を、きつちりと貧しい人々に届ける」仕組みを作らねばならない。7月は、国会に向けたメールや、請願、フックスなどを集中させて、50億ドル(税金だ!)の有効活用を訴えねばならない。

※このアフガン取材を約30分の映像にまとめました。希望される方は、ファックスかメールで西谷までお申し込み下さい。後日郵送します。

「原子力 明るい未来のエネルギー」。

看板が飛び込んできた。

「原子力 明るい未来のエネルギー」。



これが「明るい未来のエネルギー」を推進した結果だ

イクロに跳ね上がった。これは除染できるレベルではない。こ

こは半永久的に人が入ってはならない場所になってしまった。

「原発さえなければ、私たちは故郷を捨てずにすんだのです。私たちの先祖がこの村をつないで、つないでやってきたのに……まさかこんな形で何もかも失うなんてね……」。この村で生まれ育った奥さんがつぶやく。「あきらめたらダメですけど、でもあきらめるしかないかもね」。

浪江町を抜けて双葉町へ。さすがにここで放射線防護服を着る。JR常磐線双葉駅前、やはり線量計がピーピー鳴り出す。原発から5キロ圏内に入る。車内で線量が6、7、8マイクロと上がっていく。双葉町体育館が見える。車が体育館の方へカーブを曲がりきったとき、その



空間線量で8マイクロを越えていく……

311から一年が過ぎた。昨年末政府は「原発事故は収束した」と一方的に宣言したが、被害は延々と続いており、補償も生活再建も遅々として進んでいない。大量の汚染水は海に流れ続け、爆発で傾いた第1原発からは、今も放射能が漏れ続けている。故郷を、生活を、復興への夢や希望を根こそぎ奪っていく原発事故。フクシマから学ぶ

何という皮肉な標語。プラッタクジョークのような看板の下で、やはり防護服を来た一団が線量を量っている。かすかに、「40マイクロ出てる」との声がこちらまで聞こえる。原発の補助金だらう、駅舎も体育館も立派な建物。それだけによりいっそう悲しい現実が目の前に展開している。



津波で流された車と自転車

いて、線路から海側は全て流されて、山側に家屋が残っている。津波被害を逃れた山側の町も、原発事故で住めなくなつた。駅前商店街は地震で崩れたままの状態。駅のそばに自転車駐輪場があり、たくさん自転車が倒れたままになっている。この駅からたくさん通学していた。「通学用自転車 富1中031」「O d a k a Technical High School 08-190」。富岡町第一中学、小高工業高校の自転車だろっか。

「中学生も津波で流された子がいね。家も流されたので、形見はあの自転車だけ、という子もいるのよ。でもここが立ち入り禁止区域でしょ。形見の自転車さえ、取りに来れないの」。



この中の何台かは、すでに「主人」を失っている……

奥さんの横川千恵さんが、「地元の人しか知らない情報」を伝えてくれる。この地震で倒れた自転車の何台かは、主がいなくなつて1年、ここでひっそりと倒れ続けているのだ。

横川さんは、この小高駅前商店街のすれに、和菓子店を出店していた。昭和48年、娘の出産にあわせてここで商売をはじめたという。

店の中へ。地震で大きく傾いた商品陳列棚。店内には桜の造花。その奥にある日めくりカレンダーには3月11日という大きな文字。あの日東北の寒い冬が終わり、来るべき春を待つ、浮き浮きした季節だった。あれから1年、この店は倉庫に変わった。仮に立ち入り禁止が解けたとしても、商店街には人が戻つて来ないだろう。この場所

の商売は、あきらめざるを得ない。

商店街から山側の集落に入っていく。建設中の常磐高速道路を越えたあたりで、アラームが鳴り出す。

「2マイクロを越えると、警戒音になるんですよ。横川さんが握るハンドルの隣に、緑色の線量計。車内で2マイクロ、外はもっと出ているはずだ。車が峠道を駆け上がったところに「牛に注意」という手書きの看板。野生化した牛が道路を横断している時に、車とぶつかる事故が多発したのだ。「牛に注意」の看板を何枚かやり過ぎしたところにY牧場があった。

牛の頭蓋骨が4つ並び、「東電、国は大損害を償え」という怒りの看板。牧場主が書いたものだろう。その赤いペンキの文



赤ペンキで書かれた抗議の看板。血の涙で書かれたようだ

字は、農民たち、酪農家たちの血の涙で書かれたようだ。

ピーピー。線量計が不気味に鳴り続ける。空間線量で毎時9マイクロシーベルト。もしここに1年立ってれば、78ミリシ



餓死した牛の頭蓋骨が並んでいた

1ベルトの被曝。おそらく何年かでがんになってしまふ被曝量だ。試しに線量計を地面に置いてみる。

9、10、12……。数値は牧草の上で14マイクロ、森の中で15マ

べき重い現実。そんな中、政府も電力会社も「電気が足りなくなる」と福井県大飯原発の再稼働を急いでいる。彼らが言うのは、経済性や効率。東京・永田町で政局を、駆け引きを続けているうちに、言葉からは人間らしい温かさが失われ、政治への深い失望が生まれる。

「政府のエライさんや電力会社の社長さんは、県庁とか、市役所には来て謝罪するが、このような汚染された現場には来ないにすべきなのだ。」

「政府のエライさんや電力会社の社長さんは、県庁とか、市役所には来て謝罪するが、このような汚染された現場には来ないにすべきなのだ。」

「と横川さん。再稼働を言う前に東電も政府も、今一度、現場へ来て、この現実を目の当たりにすべきなのだ。」

※この福島ルポを20分ほどの映像にまとめたDVDを作成しました。希望される方は、ファックスかメールで西谷までお申し込みください。後日郵送いたします。

シリア(周辺?)に行つてきます

詳しいルポは次号で

このニュースがみなさんのお手元に届く頃、私はシリア周辺のヨルダンかレバノンにいます。具体的な日程は、4月13日に関空を出て、まずはヨルダンの首都アンマンへ。まずはアンマンで、シリア内戦で逃げて来た難民たちを取材し、その後レバノンへ飛び、同じく難民取材を続ける予定です。

シリア国内に入るのは無理かもしれませんが、できるだけ近づきたいと考えています。

シリアのダマスカスには、07年から08年にかけて4回訪れています。町の至る所にアサド大統領親子の肖像画がかけてあって、フセイン時代のイラク、現在の北朝鮮のような「個人崇拜」文化でした。ただ人々の生活ぶり、それほど貧困化しているようでもなく、多くのイラク難民を受け入れていたアサド政権は、早々にイラク難民を追い出した、他の近隣諸国より「人道的」に見えました。米

は、イラク、アフガン戦争で多額の戦費を使い果たしているの、シリアへの空爆などは、おそらく避けられると思いますが、内戦が長引くと、どうなるか分かりません。

4月10日から「停戦合意」がされるようですが、それは口だけになる可能性も高く、まして難民たちが帰還できるのは、まだまだ先の話になるでしょう。

リビアに比べて、シリアには石油が出ないことと、周辺国、イスラエルやイランとの関連で、「アサドが倒れると、余波が及ぶ」国も多いので、水面下の政治的駆け引きで、人々は翻弄されていくと思われま

日本においても、なかなか本質が見えないので、今回急ぎよ、現地へ飛ぶことにしました。次号は、シリアルルポをお伝えできると思いますが、

新しい風

日本ではまだ底冷えのする季節。2月の終わり。ミャンマーは本格的な夏が始まる少し前で、マンダレー空港に着いた頃には、日差しが少しジリリとした。空港から街までは新しく整備されたハイウェイが真っ直ぐに通じ、金色の塔（パゴダ）やバナナ畑、牛がのんびりと移動する光景がゆったりと流れていた。マンダレー市内に着くと、i-phoneやi-padの店や大型のショッピングセンターがあり、事前に聞いていた「物質的に何も無いところ」ではなかった。たくさんの店が軒をつらね、必要なものは何でも買えた。日本では考えられないほどひとつの店の中で働いている人が多く驚いた。ドアを開ける人、1人1人に担当してついてまわる店員、レストランの注文を聞く人、その後ろで一緒に注文を聞く人、その周りでまたその注文を聞く人・・・といった感じで、無駄ではないのか？と日本では思われるような労働力の使い方も、機械を使わずにどこまでも人が働きを担っているという温かみがあった。

軍事政権の抑圧から民主化へと向かうこの国は、まだまだ外国人である私たちがホテル以外に宿泊する事は不可能であり、改革や変革を恐れているところがある。しかしながら、世界がその資源や可能性に注目し、活発な変化の只中にあるミャンマーは、確かに生き生きとしていた。男性も女性も共に働き、管理職や役職に就く女性も多かった。街は夜まで賑やかで、露店ではフルーツやポップミュージックのCD等、遅くまでその香りや音が溢れていた。

数年前までは停電は当たり前で、少し人々が集えば公安が見張りに来、紙もペンも何もないところだったと聞いて来た私は、この国の急速な発展、新しい風を肌で感じた。おそらく今しかできない体験だったのは、5大宗教（仏教、イスラム教、キリスト教、ヒンズー教、ユダヤ教）の信者が垣根を越えて、共にプラスチックごみを回収するプログラムに参加した事だった。急速な発展とともに、入っ

来た「便利さ」の一つがプラスチックであり、それらを処理する仕組みが追い付いていないミャンマーはごみで溢れていた。今までは家庭で出るごみは、家のまわりに捨てても、土に還るものだった。人々はこれまでの習慣から、半永久的に土に還らないプラスチックごみをどんどん捨てる。このプログラムでは5つの宗教を越えて若者が集い、自分たちが生活する社会をよりよくするために共に活動する事が目的とされており、月に1度行われている。少し前のミャンマーでは、若者が集う事すらできなかったはずだ。この取り組みに参加できた事だけでも私たちにとっては大きな学びだったが、ここに1週間前に釈放された元政治犯である民主化運動のリーダーたちが偶然にも参加していた。彼らはそこに集まった若者たちに、こうして社会のために行動してほしい、私たちも共に活動すると話していた。ミャンマーでは誰もが知っているほど有名な彼らが、若者と一緒にゴミの山でゴミを拾う。その姿の中に、ミャンマーの人たちの本当の民主化への力を見た気がした。

トラックの荷台に乗ってあちこち回った私たちには、都市と農村の激しい格差を見ることができた。貧しい地域と豊かな地域での生活レベルには大きな差があった。ストリートチルドレンの物乞いや、児童労働の現状にも触れ、急スピードで進む発展のひずみの中にもいる子どもたちに社会のあり方を考えさせられた。大きな経済活動と改革の中にあっても、どこかノスタルジー漂う、人と人が繋がり合うあたたかい暮らしも見える。新しい風が国中を駆けまわっても、なぜか穏やかで緩やかな印象があるのはきっと、どこでも「ミンガラバー（こんにちは）」ひとつで笑顔が交わされる人々の優しさのせいかもしれない。ミャンマーのこれからは、この人たちの素敵な笑顔をますますキラキラさせてくれる事を願い、一緒にごみを拾った青年たちの力を信じていたい。近藤麻衣（大阪YMCA）

編集後記

シリアのダマスカスには07年～08年にかけて「イラク難民取材」で入りました。治安は安定していましたが、下町でビデオカメラを回すと秘密警察にチェックされました。生活はそれほど苦しくないが、政治的自由は制限されている、そんな国を変えたかったのでしょう。シリアの今後を憂えています。

『イラクの子どもを救う会』事務局便り⑬



春が近いせいか雨が本当に多いです。皆様、いかがお過ごしでしょうか。この度は、アフガン支援のためにカンパを多数いただきました、同時に振替用紙の通信欄にはたくさんの応援メッセージ、本当にありがとうございました。

日本の春はスタートというイメージが強いですね。社会では絶えることなくいろんな出来事が起きていて、たくさんの情報はいってくるし、自分も忙しく動いていると、今いる場所がわからなくなったり、思ってもみない方にいついたことに気が付いたりします。たまには静かな時間をとって、どこに行こうとしていたのか、本当はどこにいきたいのか、といった大事なものを確認する時間も春には必要だなって感じています。みなさんは、いかがですか？（釘嶋）

【お知らせ】

1. ニュースレター配布停止は 御手数ですが、当会までお知らせ下さい。尚、ニュースレターはメール便で発送しております。転居先まで追跡ができませんので、転居がきまりましたらお知らせしていただけると非常に嬉しいです。よろしくお願ひします。
2. DVD「ジャーハダ」「GOBAKU」の感想をお待ちしております。
〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-19-14 FAX: 06(6875)8980
ご意見、感想などはこちらにお寄せください、お待ちしております。office@nowiraq.com

募金のあて先

- ① 三井住友銀行 吹田支店
普通 3712329
イラクの子どもを救う会 西谷文和
- ② 郵便振込 00970-5-222501
イラクの子どもを救う会